HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	団塊の思想? あるいは保守と革新の原義 : 佐伯啓思『学問の力』(NTT出版,二〇〇六年)をめぐって
著者	犬飼, 裕一
引用	北海学園大学学園論集, 129: A1-A15
発行日	2006-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

団塊の思想？　あるいは保守と革新の原義

――佐伯啓思『学問の力』（ＮＴＴ出版二〇〇六年）をめぐって――

犬飼裕一

むろん、世代などというものは、厳密に限定できるわけではありません。団塊の世代とは、通常は、戦争が終わって昭和二十一、二年あたりから二十四年にかけて生まれたものをさす。私は二十四年の十二月三十一日にうまれていますから、厳密な意味では、団塊世代の文字通りいちばんしんがりです。……哲学者のオルテガは、世代こそが、もっとも重要な社会学的なカテゴリーのひとつだ、といっていますが、まさにそうだと思います。（一〇八―一〇九頁）

1．宣伝（プロパガンダ）の二十世紀を総括するには

思想が信頼を失い、冷ややかな視線で眺められるようになってからかなりの時間がたつ。反省の意味も込めていうならば、「思想」の問題に取り組む人々自身が、思想を括弧に入れ、モノとして対象化し、冷たい態度で、突き放して取り扱うことに習熟しすぎてしまっている。自らの基盤を侵食することが主な仕事になってしまっている。思想が自食傾向に陥っているのである。何か肝心なところで、間違いが起こっているのではないだろうか。この種の疑問がわいてくるのも不思議ではない。

しかし、その一方で、思想をなんとかして再生しようという動きも起こりつつある。皮肉な目で眺めようと、冷たい表情で笑おうと、不安を隠すために絶叫しようと、人間は、おそらく思想なしでは生きられない。平凡で退屈な日常生活に、突発事態の極限状態に、人々は、毎度、思想の世話になっている。サラリーマンが毎月家族に給料を運ぶのにも、犯罪発生で警察官が現行犯逮捕するにも、近代と近代化をめぐる思想が不可分に関係している。人々がそれを意識しないのは、あたりまえすぎて陳腐になっているからである。話をもっと広げていうならば、人間は、自分が日ごろ慣れて飽きている行動に意味を求めるとき、何らかの思想を必要とするのである。

たとえば、近年になって日本国内では「戦後」を問い直す著作が次々と刊行されつつある。「戦後」については俺たちに任せろといった調子で議論してきた世代が、後続の世代によるさめた判断にさらされつつある。体験をめぐる熱い回顧が、冷ややかな検討に付されつつある。同時代には熱狂を持って迎えられた議論が、呆れるよう

な自己矛盾でしかないといった事態も次第に見えるようになってきた。文字テキストは、それが書かれた時点では同時代の人々の体験と相補って理解される。ところが、時間が経過し、同時代の体験から切り離されると、テキスト自体の整合性が何よりも問題になるからである。過去に対して寛容な歴史家は、何に対しても「その当時はいたしかたなかった」といった理解を示そうとする。しかし、すべての人々が過去に寛容である理由も、また歴史家である必要もないだろう。このことは、「戦後」だけに限ったことではなく、二十世紀全体についてもいえることである。

二十世紀は、それが終結してようやく実像を現わしつつある。当時は種々の党派に分かれて互いに非難合戦を繰り広げていた人々も、大方は引退し、後の世代から突き放した視点で回顧される可能性や必要性が出てきているからでもある。この世紀に、日本社会でひどく頻繁に用いられた言葉に、「総括」というのがある。ただし、この世紀自体は、まだ総括されていない。総括は、この言葉を愛用したのとは、恐らく別の世代によって行なわれるべきだからである。

二十世紀という時代を象徴しているのと同時に、今日でも言論世界での存在意義を失っていない概念に、「保守」と「革新」がある。考えてみれば、各種多彩な宣伝(プロパガンダ)に彩られた二十世紀にあって、これほど意味内容に変動が起きた概念も多くはない。さらにいえば、これほど人々の思考を混乱させてきた言葉もない。個人的な印象を述べさせていただくならば、一九九〇年の記憶が忘れがたい。ソビエト政権崩壊に向かう過程で、ロシア国内の各勢力が闘争を繰り広げる様子を報じるにあたって、当時のマスコミは「保守」派と「改革」派の対立という言葉で説明しようとしていた。ここでは、ソビエト社会主義体制を維持しようとするのが「保守」派であり、「民主主義」とアメリカ型の市場経済を実現しようとするのが、「改革」派であった。これは、従来の日本国内の用語法を完全に裏切っていた。それどころか、年来「進歩派」を標榜してきたマスコミ人までが、「民主化に抵抗する頑迷固陋なソビエト共産党保守派」を指して、口を極めてこきおろしていた様子も印象に残っている。肝心のソビエト政権は、「民主主義」を掲げて帝政ロシアを打倒した政権だったのではなかったのか？　そもそも、「進歩」というのはいったい何なのか？

大学生だった私の頭の中は混乱していた。この混乱はほとんど絶望的で、それまでに見慣れた教育の世界や書物の世界が、すべてあべこべの言語で書かれていたのではないのか。あるいは、すべては嘘だったのではないのか、という疑問がつきまとうようになってしまった。この混乱は、今でも解消されてはいない。

「言葉」を、人間の思想を正しく表現する手段であると考える若者ほど混乱や困惑は深かったはずである。言葉を、試験のための一夜漬けの手段や、商品の宣伝文句のような使い捨て道具として割り切ることができるならば、混乱は少なかっただろう。振り返ってみれば、二十世紀、そして「戦後」は、多少なりともまじめに思考する人々の頭を混乱させる要素ばかりが終始した一世紀だったのではなかったのか。

長年の混乱の解決には程遠いとしても、混乱の内実に対して考えるヒントを与えてくれる本が先ごろ刊行された。**佐伯啓思『学問の**

力』（NTT出版二〇〇六年）である。著者佐伯は、「保守」と「革新」を中軸にすえて議論を展開する。佐伯は、一九四九年の生まれ。「団塊世代の文字通りいちばんしんがりです」（一〇九頁）と語る当人は、「団塊の世代」の〝しんがり〟として、同世代の主張を代弁しようとする。いうならば、〝団塊の思想〟がここで「総括」されるわけである。

ただし、ここで語られる〝団塊の思想〟は、後の世代が、さんざん見せつけられ、いい加減飽きてきた代物とはかなり趣を異にする。〝しんがり〟の存在理由は、もちろん遅れてやってくることにある。遅れてやってきた者は、先行する人々の流行には乗り遅れている代わりに、同世代の流行を醒めた目で「総括」することができるのかもしれない。先行者が疾走するのに精一杯であったならば、〝しんがり〟は彼らの背中を見ながら思索にふける特権をもつ。あれはいったい何だったのか？　という問いを、静かに積み重ねることができるからである。

佐伯によれば、当時は、「今となってはほとんど信じがたいこと」（七六頁）が、権威ある人々によって盛んに主張されていたとのことである。具体的に誰がどんなことを言っていたのかは、それ自体興味をそそることではある。ただし、六〇年代、七〇年代の言論世界の情況については各所で語られているので、ここであらためて佐伯の体験を紹介するまでもないだろう。重要なことは、佐伯自身の世代的な好悪感情を追体験することではない。年少の世代にとっては、そのような同時代的省察を超えたところにある諸問題のほうが重要だからである。同世代でなければ体感できないような体験は、当たり前のことながら同世代でしか実感できないからでもある。

2．専門主義とポスト・モダン

しかし、多少うしろめたい気持ちを抱きながら二十数年にもわたって気楽な遊民的生活をしていた私からしても、近年の学問世界の硬直ぶりと無節操ぶりは、いささか度を越しているのではないか、という気がしてきます。むろん私もそのなかにいるので、これは自分にも返ってくるのですが、今日ほど、学問が、その緊張感を失っている時代はめずらしいのではないか、と思います。『職業としての学問』のなかでウェーバーが述べた、自分が何を対象としてどのような意思をもって学問に対しているか、という自覚的な緊張感や倫理観がほとんど失われているように思えるのです。ウェーバーが別の書物のなかで述べている言い方をもじれば、「精神なき専門家や倫理なき享楽人」が学問の世界を占拠しつつあるように思えるのです。（四頁）

このように問いかける佐伯は、ともかくも自分の頭で考えようとする。佐伯の議論全体にあって、とりわけ印象的なのは、学問や思想というものをあくまでも信じたいという情熱である。この本の最大の新鮮さは、「学問の力」という表題にあるのかもしれない。いまどきこんなタイトルを掲げる本を書く人物は、そのこと自体で興味の対象となりうるからである。ただし、「思想」という看板を掲げたならば、思想や学問の力を信じるのはあたりまえであろう。ところが、以前ならば当たり前であったことが、当たり前ではなくなりつつあるのも事実なのである。

人文社会科学系統と呼ばれる領域をしばらくの間読んでいくと、しばしば同一の著者が二種類の立場を使い分けて語っているのに気づく。一つは、〝学術書〟の語りであり、もう一つは〝一般書〟のそ

れである。前者は、多くの場合、ハードカバーの単行本に該当し、後者は、新書に代表される。専門領域を自称する人々は、しばしば「新書」を馬鹿にし、タイトルと裏表紙の宣伝文句で売る商業主義を軽蔑する。一方が、真剣な「研究」であり、他方が、肩の力の抜けた「入門」や「啓蒙」なのだというわけである。

しかし、こと人文社会科学にあって問題は単純ではない。なぜなら、〝学術書〟は、しばしば「勉強して書いた本」であるのに対し、〝一般書〟は著者が年来考えてきたことを自分の言葉で噛み砕いて書いているからである。「横のものを縦にする」などといった言い方があるように、〝学術書〟では、著者が外国語の文献を読んで、内容をそのまま書いている場合がよくある。開巻から、「……が展開する……論を手がかりに、ポスト……情況の……性について……的な……(……は適宜カタカナ用語を)」といった調子で、大きな本の冒頭からいきなりカタカナの人名と術語が連続するといった本は、毎度おなじみである。その場合、著者によっては、当人が議論しているのか、あるいは紹介している文献の原著者が主張しているのか、区別が困難であるといった場合もある。文体はおおむね難解で、著者自身の試行錯誤がそのまま出ているものもある。もちろん、これも知的探求に必要な過程であり、単純に非難するには当たらない。これに対し、良質な〝一般書〟の場合、著者の深い思考が理解しやすい言葉で要約されていることがある。表現の難解さや本の分厚さが、内容の高度さと反比例する場合すらある。五〇〇〇円の大判学術書が上等で、七〇〇円の新書が下等であるとは言い切れないのである。

佐伯は、これらの関係をかなり意識している。外国語の本や資料の山を書斎の机に積み上げて引用や注記だらけの難文を書くよりも、日ごろ考えてきたことを空で、しかも明瞭に語ることに価値を見出そうとする。大事なのは、自分で考えることなのである。佐伯が「語りおろし」と呼ぶこの本は、「最初から本にするために、すべて語りおろしでテープに向かってしゃべるという、孤独な体験」(二八二頁)によって生まれたとのことである。見方によっては、ずいぶん傲慢不遜で、かなり慢心した態度が生み出した本であるということもできよう。ただし、ここで重要なことは、著者自身についての倫理的・美的判断ではなくて、著者が「日ごろ考えてきたこと」をいかに評価するのかということである。

いつの時代の、いかなる場所にあっても、〝考えること〟は自分自身が存在する〝いま〟と〝ここで〟に終始する他はない。今日の日本社会にあって、〝考えること〟は、〝いま〟と〝ここで〟使用可能なすべての素材を総動員することである。ところが、今日、世界的な現象として、特定の領域だけで考えることを推奨する傾向が、ますます強まりつつある。しかも、それが縮小再生産の過程に置かれているのである。

以前の人々が「哲学」について考えたならば、その次の世代は、「カント哲学」や「ハイデガー哲学」に思考を限定し、その次の世代は、さらに「カント哲学における……概念」や「ハイデガー哲学における……論」に限定する。それらが一巡すると、今度は、「日本における」という限定辞がつくようになり、「日本におけるカント哲学受容」といった議論の次には、「日本におけるカント哲学……概念」という研究が盛んになる。そして、「哲学」と呼ばれる領域のなかに

あっても、それぞれの分野で、ほとんど会話が成立しないという状況が生じてくるのである。

この結果、人々は「哲学」、すなわち〝いま〟と〝ここで〟からますます遠ざかっていくことになる。このことは、哲学が切れば血が出るような日常から遠ざかり、特定の専門家だけが興味をもつ専門学科としての「哲学史」へと追い込まれていく過程であるともいえる。特定の領域の「専門家」は、次第に研究対象から切り離され、歴代の哲学者たちが直面していた〝いま〟と〝ここで〟も、純粋に客観的な研究対象であるということになってしまう。それは、いうならば「他人事」であり、どうなっても自分には関係のない、はるか彼方の出来事なのである。

それは、特定の領域だけに極端に綿密な興味を抱く一方で、その他の領域については無関心な「オタク」の守備範囲であって、自分たちがおかれている〝いま〟と〝ここで〟について真剣に思考する哲学の課題ではない。「哲学の衰退」が叫ばれて久しいが、その内実は、〝いま〟と〝ここで〟への距離化（隔たりの拡大）であると考えれば納得がいくのではないだろうか。

ただし、〝いま〟と〝ここで〟に直面することは、「思想」とか「哲学」について多少なりとも専門的な文章を書いたことのある人間ならば、容易なことではないことがわかっている。一般人が知らない外国語の人名や術語をたくさん使って議論することは、それらについてよく知っている人々にとっては難しいことではない。専門知識は、通常の場合、それを知っていることによって一般の人々よりもより厳密に思考するためのものでなければならない。ところが、長年にわたって専門知識が蓄積されてくると、思考の手段というよりも、専門家を自称する人々を、外部から防御する役割の方が重要になってくる。大仰な術語の外壁を取り除くと、前例墨守や素朴な好悪感情や党派心や人間関係ばかりの、見栄えのしない「小市民」の姿が飛び出してくる危険がある。そもそも、難しい本を読んで、内容を難しく紹介するというのは、それほど自慢のできる仕事ではない。そんなことよりもはるかに難しいのは、カタカナの人名や外国語の術語による防御を放棄して、すべての責任を引き受けて、自分の考えたこととして提示することである。

この点で、佐伯の仕事は近年にあって他に類例が見当たらないものであるといえる。通常は原子炉のように多層の隔壁で厳重に守られている「思想」が、佐伯にあっては日常という大気圏に露出しているからである。ただし、そこから発散する思想が、平凡でどこにでもありふれた代物であるならば、冷たい視線から著者を守ってくれるものはない。

考えてみれば、「思想」に専門知識や専門家の権限、専門主義を設定すること自体が矛盾をはらんでいた。人間が思考する動物であり、思想とは人間の思考そのものであるならば、地上の人間を「思想」から排除するというのはおかしな話であろう。ただし、この矛盾を突くことは、例えば佐伯のような専門家には危険な賭けであるともいえる。社会学風の分析を加えるならば、専門家自身が自分の属する職能集団の存立基盤を掘り崩しているともいえよう。ただし、佐伯にとって優先されるのは、集団の利益よりも、目的としての「思想」を復権させることなのである。

ただし、専門主義の行きすぎへの批判はなにも今に始まったことではない。それどころか、十九世紀以来の「思想」の主題の一つが、専門主義批判であったとすらいえる。ここではニーチェの名前を挙げれば十分だろう。日本では、丸山眞男の「蛸壺（タコツボ）」論も同種の問題を扱っていた。ところが、面白いことに、肝心の専門主義批判の思想そのものが、しばらくすると専門的研究の対象となる。何某の「専門主義批判」を専門とする専門家が、門外漢による議論の非専門性（素人臭さ）を批判するというわけである。さらに、その種の議論の含む矛盾についても多く論じられてきた。たとえば、ニーチェが死んでから百年以上、すでにこの人物についてだけでも、幾重にも専門分化とその批判が積み重ねられている。

「ポスト・モダン」という名前を掲げて注目を浴びた思想運動の原動力の一部もまた、専門主義に対する批判にあったことは間違いない。同運動の主唱者の多くが「ニーチェ」の名前を掲げたのは、ヨーロッパ思想史の「専門知識」とも整合性が取れるところである。専門分化が極端に進み、互いに会話（コミュニケーション）不能になってしまった知識人たちは、既存の枠組みや学科を越えた知のあり方を模索してきた。「学際」や「超域」といった言葉が日本国内でももてはやされた時期は、「ポスト・モダン」という言葉が新鮮さを保っていた時期と重なる。古風な大学人ならば思いつきもしない要素を組み合わせた同種の議論は、ずいぶんと斬新な雰囲気を振りまいていた。

ただし、ポスト・モダンの議論は、佐伯によると二つの点でそれぞれに限界に突き当たる。一つは、「思いつきもしない」ことそのものが、宿命的に背負っている運命である。他人が思いつきもしないということは、その人の着想力に全面的に依存しているということである。意外性は人を驚かせ、時に夢中にさせるが、驚きや熱中が冷めればそれまでである。結局のところ後に残るのは、思想ではなくて、意外性や斬新さを発揮した個人の魅力だけである。しかも、この種の魅力は次から次へと消費され消えていく。これを佐伯は「個人芸」あるいは「知の芸能化」と呼ぶ（三一―三三頁）。

さらに、ポスト・モダンは表向きでは「近代（モダン）」への容赦のない批判を掲げながら、実際には近代の延長上にある。さらにいえば、前近代から近代を経て後近代（ポスト・モダン）へという直線的な歴史観を保持しているという点で、古くからの近代主義、とりわけ「革新」や「左翼」が敷いたレールから出ていない。つまり、現下の世界の諸悪は、すべて「近代」が根源であり、「近代」を克服した「後近代（ポスト・モダン）」では多くの問題が解決されるのだという信念が保持されているわけである。つまり、前近代から近代を経て後近代（ポスト・モダン）へと向かう過程で、人間と人間社会は、後に向かうほど賢明になり改善されるのだという信念である。そもそも、『20世紀とは何だったのか』（ＰＨＰ新書二〇〇四年）という著作を書き、『人間は進歩してきたのか』（ＰＨＰ新書二〇〇三年）を反語として問うてきた佐伯は、この信念を受け入れない。二十世紀は、佐伯の考えではこの種の信念を全面的に裏切る世紀であった。「進歩派」が信奉した「先進国」が、実は「途上国」であり、進歩への途上にあるとされた半封建社会が、実は先進的であるということになる。過去の「後進国」が以前の「先進国」に技術や資金を援助したりするのである。先進と後進が何度も入れ替わり、後に残った

のは「進歩」に代表される思想の言葉に対する不信感であった。

3．教養主義と団塊の言い分

佐伯の議論の特徴は、「団塊（の世代）」と「教養主義」を接合してみせているところにある。通説では、良くも悪しくも、大正教養主義の余韻、あるいは残存物を最も徹底的に破壊したのが「団塊」であったということになっている。西田幾多郎や和辻哲郎に象徴され、丸山眞男に受け継がれた旧制高校的教養主義を根底から否定したのが、同世代の「全共闘」であったというわけである。

佐伯はこの前提から出発しながら、同時に西田や和辻が残した遺産――教養主義――を何とかして現代に再生しようとする。気が遠くなるほど難しい課題である。個人的な感想を付け加えるならば、全共闘に対する同世代としての好悪両面（アンビヴァレントな）の態度は、佐伯の『学問の力』の最大の魅力でもある。「しんがり」の本領が発揮される場面ともいえよう。

佐伯が選んだ方策は、「全共闘的なもの」（八一頁以下）がはらんでいた矛盾、あるいは二面性（アンビヴァレンス）を指摘し、強調することにあった。佐伯によれば、全共闘は「（大正）教養主義」に対する批判のなかで多くのことを主張していた。ひとつは「デッカンショ（デカルト・カント・ショーペンハウアー）」という標語がいみじくも物語っていた西洋崇拝に対する批判である。佐伯の言葉を借りれば、「西洋から輸入された学問なり教養のあり方にたいする反発」（九八頁）である。それは、学歴エリートが明治以来誇示してきた西洋由来の教養に対する一般人の側からの反発でもあった。「頭の中で考えただけで、西洋から輸入した学問を日本に当てはめようとしても、それは間違っている」（九九頁）というわけである。

ここで取り上げられるのは、丸山眞男に対する吉本隆明の批判である。吉本に代表される批判者たちによると、丸山は太平洋戦争時の「本当の知識人」と「二流の知識人（エセ知識人）」を区別し、ファシズム（超国家主義）の狂乱を後者のせいにしたとのことである。正しいヨーロッパの学問を身に着けた本当の知識人は、市井で気勢を上げたエセ知識人とは異なって無謀な戦争には反対したのだというわけである。この種の特権主義が含んでいる欺瞞を突いたのが、吉本であり、全共闘でもあった。現に「本当の知識人」であったはずの西田も和辻も、その他の帝国大学を代表する錚々たる教授たちも、「戦争」をめぐって完全に無罪とはいえないからである。またこの種の批判を得意としたのも全共闘であった。この場合重要なことは、丸山眞男の真意がどこにあるのかということや、言説を当初の文脈から正しく理解することではない。むしろ、その種の評判が当時の人々――全共闘世代の人々――にかなり共有されていたという事実である。他方で、佐伯は、丸山に代表される「東大」と吉本が代表する「在野」の対立として説明しようともする。

つまり、全共闘とその世代は「西洋から輸入された学問なり教養のあり方にたいする反発」を足がかりにして、内発的な「教養」や、ほかならぬ「思想」を実現しようとしたのだと、この著者は考えるのである。佐伯の議論を延長するならば、丸山に象徴される権威は、先に触れた専門主義を象徴しているともいえる。正しい手続き（＝西洋直輸入）や経歴（＝東大、官学アカデミズム）を経た「本当の

知識人(＝専門家)」だけが独占し、それ以外の人々(＝在野、民間)の思想を排除する傾向である。これに対して、全共闘は日本人と日本社会の伝統に根ざした思想を回復しようとしたのだという。

また、ここにも全共闘の二面性が出ている。究極の「革新」を追求した全共闘が、探求の末に、日本の伝統に行き着いてしまうのである。新しい社会を求めた人々が、古い社会の思想を再興しようとする。振り返ってみるならば、世界各国において「革新」や「左翼」は未来に実現されるべき理想を追い求め、「保守」や「右翼」は過去に実現されていた美風を守り通そうとするはずであった。「革新」は未来を切り開く人間の理性や知力を信じており、「保守」はそれらに対する不信感から見慣れた過去の経験に頼ろうとする。この意味で両者は未来と過去にはっきりと分岐するはずであった。

ところが、全共闘は先行する「左翼」の権威に対する批判をも意図する。「新左翼」と呼ばれる運動がこれである。在来の「左翼」が過去の全否定による理想の未来を約束するならば、「新左翼」は約束された未来のいかがわしさや過去に根ざした思想の意義を強調する。佐伯によれば、すでにこの世代にあって、「戦後民主主義」全般が、いかがわしい偽善として疑問視されていたとのことである。ここに「団塊」の言い分がある。理想や正義を語る種々の言説が、次々と覆され、逆転されるのが二十世紀であった。この意味で、団塊の世代と全共闘はまさに二十世紀そのものを体現しているといえよう。

後の世代にとって、彼らの矛盾を指摘することで団塊の世代と全共闘を非難することは容易である。現にこの種の議論も巷に普及している。私もかなりの部分でそれらに共感していた。ただし、彼らの言い分が完全に無価値なのかというと、そうではない。この世代も、時代の背景を背に、「教養」の復興を意図していたのである。この場合の「教養」とは、輸入品ではなくて、自らの過去に根ざし、直面する現下の現実に直接対応しうる知的な素養のことなのである。

「しんがり」を自称する佐伯は、先頭を走っていた同世代人には不可能な形の代弁者なのかもしれない。佐伯は「彼ら」の底力を感じさせられる「しんがり」でもある、といえば、当人も不満はないのではなかろうか。

ただ、大正教養主義(東大＝丸山眞男)と全共闘(在野＝吉本隆明)の対立という構図を当事者たちから離れた視点から眺めるならば、もっと別の論点が見えてくるのも事実である。それは両者が依拠する思想的な出発点の違いでである。丸山の著作には、人間の知的能力に対する冷めた態度がある。多様でいかようにでもありうる知の相対性が丸山の身上である。これに対して、吉本はその種の冷めた態度を克服して民衆の実感に根ざした絶対性を獲得しようとする。種々の特権に守られたエリートの知的遊戯を蔑視する市井の庶民に切迫した現実感といえば、吉本の信奉者たちも否定はしないだろう。遊びに対する真剣。余裕に対する緊迫感である。言い換えれば、「正統」から排除された「異端」の異議申し立てというわけである。近年旗色が悪い「団塊」の言い分としては、巷で目にする大半のものよりも、かなり説得力に満ちているのも事実である。

ここで、私の個人的な疑問を付け加えておくことにする。それは、

丸山眞男の側からすれば別の主張も可能だったのではないだろうか？　という疑問である。丸山の議論からすれば、吉本隆明に代表されるような態度こそが超国家主義やファシズムの原動力であったともいえないだろうか。なにしろ、丸山は全共闘に向かって「ナチスもやらなかったこと」と叫んで悪名をとどろかせた人物である。現に、「輸入された知識に取って代わる民族の思想」、あるいは「血と土地に根ざした思考」といえば、一九三〇年代のヨーロッパ史を多少なりとも学び知っている人には思い当たるところが少なくないはずである。たとえば、これらの言説がもてはやされた当時のドイツは、第一次世界大戦の「戦後」でもあったからである。これらは、敗戦によってもたらされた虚無状態に対する熱狂的な反動として登場した言説であった。知識人は多様な価値の間で自由に浮動することが可能であるのに対し、「民族」は唯一の真理を求めるというわけである。丸山が批判者たちによって言質を取られてしまった「二流の知識人」や「エセ知識人」といった言葉が、元来指し示していたのも無責任に絶対を吹聴する人々だったのではないだろうか。これらの言葉は、鼻持ちならないエリート臭を漂わせている一方で、丸山が同時代として体験した事実をも反映していたのではないだろうか。著者佐伯の見解を尋ねたいところである。

4・「保守主義」という選択肢？

佐伯の議論にあって最も挑戦的なのは、「保守」という呪われた用語に再生の機会を与えようとするところにある。思い返してみるならば、戦後日本の知識・言論世界にあって「保守」という言葉ほど呪われ、禁忌（タブー）の対象とされてきたものは多くない。対になる語は、「革新」や「進歩」である。このように話を進めてくると、多くの人はすぐに政治的な対立の話に向かっていく。とりわけ「冷戦」と呼ばれていた国際情勢の下、日本国内でもアメリカの側に味方する立場とソビエトの側に立つ立場との間の対立がすぐに思い起こされる。そして、占領期を経て日本社会の決定的な影響を与えてきたアメリカの側が「保守」と呼ばれ、これに対決するとされていたソビエトに味方する側が「革新」と呼ばれたわけである。これは、ある意味でいたし方のないことなのかもしれない。世界中で書かれた多種多様な書物や記事が、そろって「冷戦」を再生産していたからである。また、アメリカやソビエトの軍隊が他国に攻め込む度に、国際情勢と呼ばれるものが「二つの超大国」に分断されていることを再確認したものである。振り返ってみれば、対立する二極からなる世界というのは、今日よりもはるかに分かりやすかったともいえる。五十億の人間が住む地球が、まるで野球の試合のように理解されていたのである。攻守相分かれた陣営が、「ハンガリー」や「キューバ」や「ベトナム」や「アフガニスタン」と名付けられたイニングを、互い違いに攻めたり、守ったりしているといったイメージである。

ただし、このわかりやすさがもたらした負の側面も忘れてはならない。佐伯が何よりも強調したいのは、二十世紀という時代に蓄積された堆積物を一旦除去し、「保守」と「革新」の原義に立ち返って思考を再出発させることである。その際、概念は単純であるほうが良い。専門知識をたくさん身につけなければ近寄ることができないといった種類の概念は、むしろ思考の妨げになってしまうからであ

る。

元来「保守」とは、すでに人々がよく知っている経験則を他の要素に優先する立場のことである。必然的に未来よりも過去を向いている思考であるということができる。対する「革新」とは、特定の理念や理想によってより良い未来を作り出していこうとする立場である。これまた必然的に過去よりも未来のほうを向く思考様式であるといえる。「保守」が手元にあるものから出発するのに対し、「革新」はこれから手に入るべきものについて思いをめぐらす。当たり前のことであり、あらためて教えられなければならないことは何もない。

ところが、「戦後」の日本にあっては、ほとんどあらゆる立場の人々が「過去」を否定した上で、思考を再開しようとした（一七三―一七四頁）。この意味では、戦後長い間にわたって「保守」と呼ばれてきた人々も例外ではない。戦後日本にあって、「保守」とは、そのまま冷戦でアメリカの側につく人々のことであった。しかし、肝心の「アメリカ」が、語の原義において保守的な社会なのかというとそうではない。佐伯は「アメリカは保守主義の国ではない」（一六六頁、関連して佐伯啓思『砂上の帝国アメリカ』、飛鳥新社二〇〇三年、参照）と断言する。アメリカは、国の成り立ち自体が「独立革命」に出発している。現に、アメリカは他の社会では不可能なまでに「革新」という語の原義に忠実な社会であった。このことは、この人が他のところでも力説しているように、アメリカが過去に手を切ったヨーロッパ諸国と比較すれば分かりやすい。占領軍として日本にやってきたアメリカ人たちも、「民主主義」や「自由」という理念や理想に従って、この国に良好な未来を作り出そうとする立場を堅持するのだと主張していた。アメリカ人が独立によってヨーロッパという過去と手を切ったように、日本人も敗戦によって「軍国主義」の過去と手を切らせようというわけである。

つまり、戦後日本にあっての「保守」とは、占領軍が作り出した設定をそのまま保守していくことを意図するという意味での「保守」であった。この結果、佐伯の考えでは、戦後日本には語の原義での「保守」不在の状況が続いていくことになった。戦後日本で見られた冷戦とは、ソビエト型革新とアメリカ型革新の間の対立であったということになる。ここに、この本の力点があるのはおそらく間違いないだろう。ただし、佐伯は「保守」と「革新」の原義を確認するだけでにはとどまらず、さらに議論を展開していく。

ここでひとまず目を転じると、佐伯はこの本のなかで面白いことを書いている。「頭がよい」というのには二種類あるというのである。一つは大量の情報を取り入れ整理でき、しかも高速度で次から次へと思考を展開できる頭のよさである。これをこの本では「脳の運動神経が良い」と呼ぶ（一二九頁）。これに対して、物覚えも悪く、思考も鈍重である一方で、いつも一貫した問題に取り組んでおり、着実に思考を積み重ねていく種類の人間がいるのだとのこと。一般的にいえば、前者のほうが「頭がよい」人間の典型であり、後者は種々の場面で不利な扱いを受ける。たとえば、受験勉強では前者の圧勝である。後者には、はじめから勝ち目などありえないともいえる。ただし、佐伯の信念では、思想や学問には本来は後者のほうが向いている。ところが、今日の学問や思想の世界は、種々の事情で前者

が占領してしまっており、後者は辺境に追いやられている。つまり、外国の「最新思想」を得意の語学力と情報処理能力でさっさと消化して、次から次へと商品化する能力がもてはやされている反面で、一過性の流行が過ぎれば後に何も残らない。佐伯自身の前者に対する違和感と、後者に対する思い入れは明らかである。

もちろん、佐伯が前者を「革新」に、後者を「保守」に勝手に特定しようとしているわけではない。ただし、従来の日本の学界や思想界が、「脳の運動神経が良い」人々の独断場であり、「目から鼻に抜ける」といったタイプの「理論家」を尊重する「革新」偏重の傾向にあったことは強調される。一般人が近づきがたい「最新思想」を鮮やかな手際で料理するというのは、そもそも「保守」には似つかわしくないはずである。他方で、皆がすでに持っているものや、慣れたものは、多くの場合、陳腐で古臭い印象がつきまとう。無知な大衆の蒙を啓き、科学や理性の力でより良い未来を先導するというのが、啓蒙主義とフランス革命以来の「知識人」の役割とされてきた。現に、先人の手垢がついた古書を探してくるよりも、洋書屋の新刊目録に載っているような「最新作」を外国語で読むほうが、なにやら知的に優れているような気がするわけである（このことは、私にとっても他人事ではなく、佐伯の本によって自己省察の機会を与えられたことをここで正直に記しておきたい）。

佐伯の議論から少し距離を置くならば、問題は長期にわたる日本の知的世界の歴史に関係している。ここでは江戸期以前は問わないことにしよう。あえていえば明治維新以後の日本、とりわけ「戦後」の日本にあって、人々は「革新」や「左翼」である以外の選択肢をはたしてどれだけ許されていたのかという問題である。明治は江戸を否定し、「戦後」は明治――いわゆる「戦前」――を否定しようとする。特に「過去」の全否定の上に出発したとされる「戦後」にあって、日本の知識人に「保守」という選択肢はありえなかったのではないだろうか。しかも、当時の状況を知る人々の話を聞くならば、戦争の災禍によって一般の人々ですら「過去」には憤り以外感じないとの回想がいくらでも聞かされた。「戦後」の一般人にとっても、慣れた生活とは戦時下の窮乏生活であり、死への恐怖だった。その場合、「保守」とは〝あの時代〟へ逆戻りすることを意味したわけである。

そこに、颯爽と登場したのが丸山眞男であった。過去を「超国家主義」と呼び、「ファシズム」と規定した丸山は、「戦後民主主義」に賭けると明言することで一般の人々の「過去」を清算する任務を果たす。後にも先にも知識人がこれほどの名声を一般社会から獲得した事例は多くない。当時の「丸山眞男」は、明治以来の日本知識人にとって、まさに夢のような姿である。今にいたるまで、少なくない人々が第二の丸山になりたくて、見果てぬ夢を見てきた。この場合、当人の意図はたいして重要ではない。その輝かしさに比べれば、丸山が発散するエリート臭などはたいした問題ではなかったのだろう。

ところが、時が流れ「団塊の世代」が大学に入学するころから、情況が変わってくる。佐伯の世代の人々にとって、外国から輸入された「最新思想」は、すでに丸山に象徴される勢力、端的にいえば「トーダイ（東大）」に独占されていた。しかも、「脳の運動神経が良

い」ことにかけては、彼らは第一人者ばかりだった。佐伯は受験勉強の不毛さについても書いている。

私は、一流大学に入ったものは大半はふたつに分かれるような気がしています。ひとつは、自分の無意識のインチキにまったく気づいていないもの、もうひとつは、そのことに気づいており、自分自身の学歴エリート性に大変なコンプレックスをもっているもの、このふたつです。

後者は、自身のエリート性のもつ欺瞞にどこかでコンプレックスをもっているために、だからこそ、弱者の味方であるというポーズを取り、反権力を標榜するわけです。東大生であることの「自己否定」などという言い方もその心象の現れとみれば、それほど不思議なことでもありません。しかし、そうしたねじれたルサンティマンを引きずっているものが、そのルサンティマンのゆえに「民主主義」や「人権」を掲げて学生運動をやっているのはとんでもないという感じが基本的にあったんです。(八四頁)

自身東大卒で、現在京都大学で教鞭をとる佐伯の回想は、すでに多くのことを語っているのではないだろうか。ここに佐伯自身が回顧する「全共闘的なもの」が覆いかぶさってくる。よく指摘されるところでは、「学園紛争」は旧来のエリート主義教育の延長上にあった大学教育に対する、大衆化した学生の側からの異議申し立てという性格をもっていた。「大学は出たけれど」とは戦前からの文句だが、それでも昔の大学生が少数エリートであることに変わりはなかった。これに対して、六〇年代、大学の門をくぐったのははるかに大勢の学生であり、その上大学の数も増えていた。将来を約束されない学生が、約束されていた元学生(大学教員)に対して反旗を翻したのだというわけである。

ここから出てくるのは、教養に対する再考の機会であった。佐伯の考えでは、丸山眞男に象徴される「西洋的なもの」に対決する「土着的なもの」(一〇〇頁)のなかに教養の源を求めようという傾向がこのころから登場してくる。戦後は日本軍国主義への加担を理由に一旦退けられた柳田國男や折口信夫が次第に再評価されたのも全共闘あたりからであった(一〇〇頁)。言い換えれば、明治維新や敗戦で次々と入れ替わる「教養」への疑いが広がり始めたのもこの時代であったということになるだろうか。このことは、外国から輸入されては、時間がたつと賞味期限切れで次に交換されるといった「教養」への疑問とも重なる。これは、いろいろな意味で「脳の運動神経が良い」人々が作り出した「教養」に対する、佐伯自身の疑問と言い換えてもよいだろう。

これに対して、佐伯が主張するのが、「原風景を求める教養」(九四頁)である。それは「西洋的なもの」に対決する「土着的なもの」を教養として探求することでもある。ここから佐伯が打ち出そうとするのが、日本にあっては絶えて久しい「保守」の思考を再興することであった。佐伯は、「そもそも戦後日本において、保守という思想がありうるのか」(一七二頁)と自問し、現状については否定的に答えていた。これは、おそらく未来にあっても難しい課題であろう。過去を尊ぶ「保守」を再興するには、過去を全否定することによって出発した「戦後」そのものが問い直されなければならなくなってしまうからである。

この場合、やはり参考になるのは、一旦死んだ犬のように捨てられた「戦前」を振り返り、同世代が口を極めてののしった教養主義、

とりわけ大正教養主義を再考することであろう。たとえば京都学派と呼ばれる人々の思想には、種々の欠陥や限界があったにもかかわらず、「輸入学問」にとどまらない独自の探求があった。西田幾多郎は、「カントあたりから出発しながら、ベルクソンやウィリアム・ジェームズなど、最新の西洋思想を受け入れたうえで、しかし、それを日本の立場から、仏教なり禅なりを使えばどういうふうに解釈することができるのかということを考えた」（九五頁）。少し世代が下る和辻哲郎や九鬼周造も、過去から継承された「在来」思想と輸入された思想との全面対決によって独自の立場を打ち出そうとした（九五頁以下）。ところが、戦後にあってはこの種の取り組みがほとんど消滅してしまったのである。西田や和辻や九鬼の仕事を批判することはいくらでも可能であるとしても、彼らが取り組んでいた難業を、後の人々がほとんど放棄してしまった事実は否定できない。彼らは、過去の遺産を尊重するという点で、戦後の「保守」と呼ばれた人々よりも、語の原義からいってはるかに「保守」という名にふさわしい人々であった。

少なくともいえることは、西田や和辻や九鬼といった「大正教養主義」を代表する人々には、佐伯が考える意味での「教養」もあったということである。彼らは自らの過去と外国から輸入された思想との間で、なんとか整合性を取ろうとしたし、過去を輸入思想で再生・強化しようとさえした。この点では、輸入品をすべて拒否することを目ざすタイプの「保守」――たとえば、一九三〇年代に「日本精神」云々を強調した人々――と、はっきり区別しなければならない。この問題は日本だけに限ったことではなくて、「輸入学問」という過程を経験しているあらゆる社会に当てはまる現象のはずである。それは、「輸入」や「外来」という事実と、自分自身が存在する〝いま〟と〝ここで〟とを、真剣に対決させる過程である。彼らは完全な追随者と完全な拒絶者が取る安易な道をあえて拒否した人々であった。

再度「保守」の原義に話を戻してから議論を進めると、さらに別の問題が浮上してくることになる。佐伯によると、「保守主義は、超越的で切れ味鮮やかな理性というものにはさしたる信頼」をおかず、「一人の人間が理性でもって考え出すことよりも、多くの人が従ってきた習慣の知恵のほうが信頼にたる、と考える」立場であり、「少数の人間が計画して作り上げた秩序よりも、歴史とともにいつのまにかできあがった秩序のほうをまだ好む」。「保守主義の根底にあるのは、人間という存在のもつ根源的な不安定性への恐れ」だからである（二〇六頁、この段落の引用文はすべて同所から）。宣伝（プロパガンダ）の二十世紀を経験した人間には、「天才」や「科学」を自称する人々への信頼が、かなり失われている。「支持率九九・九九……パーセント」の「天才」指導者に涙を流して歓声を送る「民族」や「労働者」という言説や映像は、今日では嘲笑や冷笑の対象でしかない。演者が命がけで演じる出し物は、凡庸なコメディアンの芸よりも、しばしば多くの笑いを引き起こす。もちろん、この種の嘲笑や冷笑は、膨大な犠牲を払い、血の海の二十世紀を生き残ってきた人類がようやく手に入れた良識、処世術、あるいは教養なのである。この意味で「天才」や「科学」を誇称する詐欺師や殺人者の手の内を研究・整理することは、あの世紀を経験した世界にあって、最も必要な良識と教養であると

いうこともできないだろうか。ただし、このあたりのことは二十世紀後半を同時代として生きてきた佐伯にとって、いまさら強調するまでもないことばかりであろう。

ただし、ここで佐伯の議論を突き放した地点で眺めてみることも無意味ではないだろう。そこから新たな疑問が湧いてくることになるからである。たとえば、この本のなかで佐伯は、丸山眞男に代表される立場と吉本隆明に代表される立場の対立を強調してきた。他方で、佐伯は「保守」(と「革新」)の原義に立ち返ることを主張してきた。この人によると、「保守」の根本にあるのは、「人間という存在のもつ根源的な不安定性への恐れ」であった。しかし、この種の恐れは、吉本よりも丸山の方にこそ強烈に表現されているのではないだろうか。周知のように、「学者」の丸山は、マンハイムの知識社会学や歴史相対主義を知的な出発点としている。もちろん「マンハイム」が外国語を介した輸入品であり、エリートの独占物であったことは事実である。しかし、丸山は人間の不安定性や、人々が抱く価値の歴史的な相対性について十分に認識していたのも事実である。言い換えれば、人間に対する懐疑こそが丸山の基本テーマだったのではないだろうか。これに対して、「詩人」を自称する吉本の著作を読むと、独断や個人の感想が全編を満たしている。当人のいう「詩」というのは、この種の判断を指すのだろう。これが特定の世代にとって特別な世代的共感を集めていたのは事実なのだろう。そのこと自体は、決して非難には値しない。しかし、別の世代にとってこの種の共感は、「彼ら」の自分勝手な思い込みでしかないのではなかろうか。

このように考え、さらに展開していくと、〝戦後〟という時代を代表した丸山眞男の「保守」性と、吉本隆明の「保守」性の両方が視野に入ってくる。当時の情況を知る人々には、丸山のなかに「保守」を見出すことは一種の皮肉ではある。しかし、佐伯がこの本のなかで展開してきた議論をふまえるならば、少なくとも佐伯自身に、丸山のなかに潜んでいる「保守」を否定することはできないはずである。まとめれば、丸山は人間能力の限界を知るという意味での「保守」であり、吉本は自らの過去や在来性を尊重するという意味での「保守」であった。ところが、これら二つの「保守」は対立していた。「左翼」だけではなくて、佐伯がいう意味での「保守」の側も対立を抱えていたのではないだろうか。言い換えれば、「保守」の内部にも、丸山と吉本の対立が含まれていたのである。

原義に立ち帰ることで、佐伯は読者を「保守」の思考へと勧誘しようとする。それは、一見するとごくありふれた選択肢の存在を強調しているだけであるように思われる。しかし、立ち止まって考えてみると、佐伯の提案が簡単に受け入れられるようなものではないことも確かである。明治以降、そして戦後以来、一貫して過去の否定という役割や機能を果たしてきた日本の知識人にとって、「保守」というのは、自らがそれまでに依存してきた前提を放棄することを意味するのではなかろうか。繰り返しになるが、西洋化や西洋主導の近代化を経た日本の知識人にとって、この百数十年、「革新」や「左翼」である以外の選択肢を選ぶことは困難であった。このことは、佐伯がさし示してくれた〝原義に立ち帰る〟という道筋を先に進んでいけばいくほど、ますます深刻な事情であるように思われてくる

のである。「過去」への否定的な態度や、過去の代替物としての「理性」や「知性」に対する信頼は、簡単に投げ捨てることができるものではない。流行の衣装を取り替えるようにはいかないのである。「革新」や「左翼」は、それらが現在不人気だからということで、〝ハイ、それでは！〟とった調子で気軽に乗り換えることのできるものではありえないからである。現に、吉本隆明を先頭に打ち立てた「全共闘」は、佐伯が主張する意味での「保守」を成立させるに至っていないように、私には思われるからである。

ここでもまた、著者佐伯に質問したい問題が登場してくる。佐伯は、当人が本来の「保守」と呼ぶもののなかにある丸山と吉本の間の矛盾・対立について、どのような説明を行うのだろうか？　ともかくも、賛成するのか否かは別として、佐伯の〝保守〟思想が、今後どのように展開していくのか注目していく必要はあるだろう。奇抜な用語や最新の外来思想など用いなくとも、佐伯が考えている問題を突き詰めていくと、本人に尋ねてみたい問題が次々と出てくる。ただし、このことこそが今日の日本に「思想」を復興しようとすることを意味するに違いないのではなかろうか？